

学 会 抄 録

第 364 回 千葉医学会例会 第 9 回 中山外科例会

昭和 34 年 12 月 13 日 (日曜) 於 附属病院屋階大講堂

(○ 印 演 者)

1. 胃炎及び十二指腸潰瘍に合併した日本住吸血虫症の 2 治験例について

青 木 次 男

教室に於て胃炎及び十二指腸潰瘍に合併した日本住血吸虫症を経験したので報告する。1 例は 56 才山梨県の男子で出血性胃炎にて胃切除術を行い剔出標本中に日本住血吸虫卵を認めた。2 例は 40 才山梨県農夫で十二指腸潰瘍にて手術を行い胃及び十二指腸粘膜下組織に虫卵結節を認めた。文献により報告例を分析の結果、虫卵は消化管では虫垂に次いで直腸に多く介在し上部消化管には少なり事を明らかにし、更に虫卵を介在した胃及び腸疾患を分類すると、胃では胃癌が多く腸では虫垂炎に次いで直腸癌が多く、更に前癌性疾患であるポリープ、肉芽腫が多い事が判り、本虫卵の長期介在刺激による癌発生の危険の多い事を述べた。

2. 教室に於ける食道憩室の症例

青 木 敏 郎

食道憩室は稀な疾患であるが、当教室では 39 例をえたので、統計的考察を加えて報告する。

食道憩室は病因的に内圧性、牽引性、機能性等に分けられ、解剖的には咽頭食道部、上気管部、上横隔膜部に多く、当教室では食道中部に 21 例、54%、下部に 12 例、31% みられている。主要症状は嚥下には通過障碍、性別は男女比は略々 2: 1、平均年齢は 48 才、憩室と診断されて入院が 10 例、手術をうけたものが 7 例、5 例が下部憩室であり、4 例に噴門癌等合併症をみた。本邦の症例では中部に最多で、大部は牽引性、次に下部、上部の順に内圧性である。外科的治療は上部憩室に Sweet 等により高率で報告されている。

食道憩室は高年の男子に多く、症状発現迄長期間を要し、合併症として炎症、穿孔等を見なければ予

後は概して良好である。

3. 興味ある上顎癌の 1 治験例

泉 宏 重

患者は 42 才の男子、主訴は左頬部腫脹、家族歴、既往歴に特記すべき事項なく、現病歴 10 年来肥厚性鼻炎に罹患し、33 年 4 月頃より左側鼻道から濃厚な黄色鼻漏が見られ、上門歯及び上嘴唇のシビレ感に気づいた。11 月頃より急に左顔面が無痛性に腫脹し、上顎癌と診断され当科を紹介された。

現症：一般検査に著変を認めず、上述の局所所見の他左眼外直筋、下大斜筋の Paräse を認めたのみであつた。レントゲン検査で左眼窩下部に淡い陰影及び左眼窩の圧排が認められた。34 年 1 月 6 日 Radical Neck Resektion 施行後、腫瘍の根治手術を行つた。経過順調で退院した。

病理組織学上腫瘍は Adenocystic basaloid type sinial carcinoma と診断された。

Merall (1957) は自験例 4 を含めて 22 例、Memorial Center for Cancer and Allied Disease (1930 ~ 1949) は 34 例を報告している。

4. 食道潰瘍の 1 治験例

磯 野 可 一

私は、最初、非特異性食道潰瘍が、これ迄に如何に少なく、特に切除される事が極めて少ない事を述べ、当教室中山外科に於いて、1959. 6 月迄に 5 例もの症例を得たので、1 症例と共に検討して見たいと思う。

症例：患者、58 才、男。主訴は 3 年前よりの通過障碍にて入院。食道癌の診断の下に、右胸腔内食道胃吻合術の手術を行い、順調な経過をとり、術後 25 日で退院す。切除標本は組織学的にも困難なるも、単なる潰瘍と診断す。